

● 選評

・ 郡司和斗 (茨城県)

蟹は黙って食え

そのあとのすごろくで

幸せになるマスへ家族は

ある典型的な家族の運命は賽に託されて、努力や親切とはかかわりのないところで転がってゆく。「蟹は黙って食え」、家族を統制する寂しく慎ましい詩。

・ 細村 星一郎 (東京都)

二百個の手が繋がれて夏祭り

「二百」の目に見えそうな多さ。「個」と言うとき手はからだから切り離される。

生者の、死者の、狭間にある者の手。手を繋ぐことはやさしく頑なに相手を引きとどめる行為だと思う。

・ 鎌倉まくら (宮城県)

鬱々と桃を食うから救えない

桃は鬱に浸食されながら、鬱は桃に点りながら。目眩がしそうな鬱と桃のあいだのひずみ。救えなさらくらくらと光る絶望。

・ 長谷川柊香 (宮城県)

遠雷

魚は

暗い海に

居る

「居ない」ことはたやすく詩情を誘う。しかし心底おそろしいのはいつだって「居る」ことの方。見えないけれど、触れないけれど、永久に通じ合えないけれど「居る」。私がここに居るだけで、誰かを何かを脅かしてしまう。

・武中 義人 (岡山県)

誰が指差しているの？

あの大空を―

誰でもいい その

指先から生きて欲しい

指を差すかたちは問いなのか答えなのか。でもほんとうにまなざすべきは、指を差す先にあるものではなく、指の起点にあるひりつくような現在地だ。

・豊富 瑞歩 (茨城県)

きつとあなたもきらいな怠惰

うれしいときにうれしいと言う

「うれしいときにうれしいと言う」。その単純は誠意の表明。言わなくても伝わ

るだろうという相手への信頼は、怠惰の裏がえしにだつてなりうる。その時言葉にしなければ感情はただ日々の泡になるだけだから。

・青木雅（埼玉県）

世界をひとつのツツコミとして

じゃあボケは何なのか。それもまた世界なのだろうと思う。戦争や災害、差別や偏見。この世界で起こることは道理の通らないグロテスクなボケと言ってもいい。どんなボケも受け入れ、回収する。世界のかぎり漫才は続く。

・白野（新潟県）

がっこうもおうちもゆめも

あるばいもしゃがんだときが

いちばんたのしい

しゃがむと視界が変わる。しゃがむと世界の真つ当さからちよつとだけ外れた気分を味わえる。見られることから逃れて、自分だけの繭に入るような感覚。そして、つらくてどうしようもないときもまたひとはしゃがむ。

・翠（東京都）

真昼でも仄暗い部屋

めだまになって

熱い恋のおわりを観てる

薄暗い部屋にいつしか私は手も脳みそもからださえ失って、完全なる傍観者になりきる。画面のなかの恋は、自分にかかわりがないからこそ凝視してられる。自粛の日々に私たちはどんどん「めだま」化している気がする。

・桜咲 (千葉県)

抱っこした

命の終わり

「終わる命」ではなく「命の終わり」。命のはじまりを抱きあげ、命を宿すために抱きよせ、命の終わりを抱く。腕はあの世とこの世の架橋となる。